公明新聞 (第3種郵便物認可)

エイズ 子どもセミナーを開催

ユニセフ 子どもネット

大人だけの問題ではない！

現状や正しい知識学ぶ

世界の子どもたちが直面するエイズ問題を知り、社会にできること、自分たちができることを考えようと、ユニセフ子どもエイズセミナーが1日、東京・港区のユニセフハウスで開かれた。セミナーは昨年8月、今年3月に続いて3回目。参加した子どもたちは、過去2回のセミナーを復習し、アフリカ・レソトを訪問したアグネス・チャン日本ユニセフ協会大使の報告などを聞きながらエイズへの認識を深め、真剣にメッセージをまとめた。

自分たちの考えをまとめる参加者

エイズは大人だけの問題ではない。確かに現在でもHIV感染者・エイズ患者の大半は成人だが、エイズ関連の病気で死亡する6人に1人、新たに感染する7人に1人は15歳未満の子どもである。さらに全世界で1500万人以上の子どもたちが、親（一方または両方）をエイズ関連の病気で失っている。エイズで死亡する子どもの大半は母子感染により生まれながらにしてHIVに感染している。母子感染を大幅に低減する薬があるにもかかわらず、その治療・支援を受けているのは、必要とする女性の1割に過ぎない。大人向け抗ウイルス薬による治療法が普及する一方で、子ども向けの同様の治療を受けられる子どもはわずか5%以下。エイズで親を失った子どもの多くが食事も満足にとれず、学校にも行けない状況にある。

チームでまとめた考えを発表するメンバー

こうした「子どものエイズ問題」に対し何ができるか——。セミナーには小学生から大学生まで約60人が参加。セミナーを企画した「ユニセフ子どもネット」のメンバーを中心に、過去2回のセミナーを復習しつつ、エイズ問題の現状や、HIV／エイズに関する正しい知識を学んだ。

アグネス・チャン大使は、HIV感染者の割合が世界で3番目に多い国・レソトを今年4月に訪問した時の模様を伝えた（要約を別掲）。カメラマンとして同行した長男の金子和平さん（19歳）は、レソトの学校（中学・高校）を訪問した折に小さなサークルが、エイズ問題を真っ正面からとらえた劇を演じるのを見て、「次の新しい世代が、エイズに対しどう考え、何をしようとしているかよく分かった」レソトには希望があると感じたと述べた。

7月にロシアで開かれたJ8（ジュニア・エイト）＝G8サミット（主要国首脳会議）のジュニア版＝に参加した都立国際高校2年生の4人が会議の様子を報告、「先進国だけでなく途上国と一緒に問題を解決していくことが大切」との感想を語った。この後、参加者は7チームに分かれ、エイズ問題で「社会にできること」「私たちができること」などを話し合った。

約1時間30分後、各チームはまとめた考えを発表。中には寸劇で表現するチームもあった。その内容はさらに要約され、4日の「AIDS文化フォーラムin横浜」（かながわ県民センター）で、「エイズとたたかう子ども宣言」（別掲）として発表された。

セミナーの最後、あいさつに立った「ユニセフ子どもネット」の一人、炭谷耕太郎君（高2）は「きょう感じたことを自分の言葉で家族や友だちに伝えることが絶対に大切。家に帰ったら家族に話すことを約束してほしい」と訴えた。

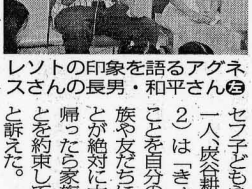
エイズとたたかう子ども宣言

☆私たちはおとなたちにうったえます☆

- すべてのおとなたちが、エイズに関する正しい知識をもって、わたしたち子どもたちをエイズからまもってください！
- 偏見をなくすために、学校や地域でエイズについてもっと教えてください！
- 発展途上国で病院や医者を増やすために、もっと援助をしてください！
- 子どもがエイズとたたかうために、募金をしてください！
- メディアの皆さん、世界の子どもたちの現状をもっと伝えてください！

☆ぼくたち、私たちはアクションを起こします☆

- エイズを特別視せず、気軽にエイズについてしゃべれる社会をつくるために、地域活動をしよう！
- エイズを身近な問題としてとらえてもらうために、友達や家族にしゃべろう！
- エイズに対する認識を深めるために、学級会で話しあおう！
- 世界のHIV／AIDSの現状を知り、認識を深めるために、学校にポスターを貼ろう！　学校の行事・放送などで発表しよう！



レソトの印象を語るアグネスさんの長男・和平さん左

皆で考えをまとめ「宣言」に

アグネス・チャン

日本ユニセフ協会大使

レソト報告

偏見、差別……でも希望はある

アフリカ南部にあるレソトは、1990年代に220万人いた人口が、近年、エイズで多くの人が一気に亡くなり、現在は180万人に減った。平均寿命も60歳から35歳に落ちている。国全体が標高3000㍍級の山々に囲われ、広さが四国の1・7倍しかない貧困国で、男性の半数近くが南アフリカへ出稼ぎに行く。その多くがHIVに感染して帰ってくる。これがレソトにHIVがまん延した理由である。

アフリカでは普通、孤児は親戚などに育てられるが、親をエイズで亡くした孤児は拒絶されている。エイズに対する正しい知識がないからだ。

こうした状況を確かめようと、私たちは首都マセルから遠く離れた、援助が一番行き届いていないといわれるボバツィ村を訪れた。村長は、自分たちだけで生活している孤児が多いことが心配だと語った。孤児が多い理由を聞くと「ある病気で親を亡くしたと言う。「エイズか」と尋ねると、村長は「その言葉は絶対に口にしない」と答えた。

それほどエイズへの偏見は根強い。村長も息子をエイズで亡くしていた。話をした場所から下方の斜面はすべて墓地。そこがいっぱいになったので別の所に墓地を作ったが、そこもいっぱいになった。毎日のように死者が出るので葬式もしなくなったという。

村長と一緒に迎えてくれた子どもたちはすべて孤児だった。私たちは13歳と10歳の姉弟の住居へ行った。彼女らは3年前に両親を亡くし、姉が一生懸命、弟の面倒をみていた。食べ物は山で集めた葉っぱを調理するなどしていた。

夜になると、彼女らは「隣のおばあちゃんの家の床で寝る」と言って出て行こうとした。理由を聞くと「人間が怖い」という。夜、男が来て怖い思いをしたらしい。私たちはそれ以上、聞けなかった。

母子感染した家族に会った時、母親から「私が感染していることを絶対に知られたくない」「この前、村で殺された感染者がいる」と言われた。彼女には3人の子どもがいる。1人は明らかに感染していた。彼女は治療を受けていない。差別を受けるから、病院へ行くのが怖いのだ。感染していることを何とか隠そう、忘れようとしていた。

しかし、私はレソトに希望はあると感じた。予防面では数々の団体が立ち上がっていて、最後に会った19歳の母親（HIV感染者）は、団体の施設に入り「産んだ子どもにできる予防策は全部やった」と、これからの子どもとの生活を前向きに考えていた。HIVに感染しても薬を飲んでいれば死なない。あとは私たちが気持ちを決めて助けられるかどうかだと思う。

HIVは、薬をきちんと飲めば母子感染を防げるし、感染しても発症しない。教育を通じ予防もできる。治療などに必要なお金も、変わらない熱意があればエイズと闘える。エイズには勝てる。日本でもエイズに対する認識はまだ低いが、まず自分の中にある差別のカベを取り除くことが、エイズ問題に取り組むスタートになると思う。